

2014年9月8日
公益財団法人イオン環境財団
生物多様性条約事務局

「The MIDORI Prize for Biodiversity 2014」(第3回生物多様性みどり賞)受賞者決定
— 10月21日(火)国際連合大学にて受賞者フォーラムを開催 —

公益財団法人イオン環境財団(理事長 岡田卓也 イオン株式会社名誉会長相談役)と国連生物多様性条約事務局(モントリオール)は、厳正な審査のもと「The MIDORI Prize for Biodiversity 2014(第3回生物多様性みどり賞)」の受賞者を決定しました。

本年の受賞者は、カマル・バワ博士(インド)、アルフレッド・オテング=イエボア博士(ガーナ)、ビビアナ・ヴィラ博士(アルゼンチン)の3名です。

本賞は、生物多様性の保全と持続可能な利用に関し、世界または地域レベルで顕著な功績のある個人を顕彰する隔年開催の国際賞で、当財団が2010年に創設しました。

第3回となる本年は、60カ国以上218名の候補者が審査対象となり、生物多様性の保全と持続可能な利用への貢献とともに2010年の生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)で採択された「愛知ターゲット」や2011年に開始した「国連生物多様性の10年」の推進において大きな寄与が認められた3名に、授賞を決定しました。

授賞式はCOP12閣僚級会合に併せ10月15日(水)韓国^{ピョンチャン}平昌で、受賞者フォーラムは10月21日(火)東京(国際連合大学)で実施する予定です。受賞者にはそれぞれ、表彰楯、記念品、副賞(10万USドル)が贈られます。

公益財団法人イオン環境財団は、これからもさまざまな取り組みを通して、生物多様性の保全と持続可能な利用の促進に貢献してまいります。

【The MIDORI Prize for Biodiversity2014 受賞者】



カマル・バワ博士

アショーカ生態学環境研究トラスト(ATREE、インド)代表
マサチューセッツ大学 ボストン校
特別教授

熱帯林の研究において、森林の再生に関する新しい手法の考案や森林崩壊が生物多様性の枯渇を招くことを示し、非木材の林産物採取に関する持続可能性や、農業ランドスケープにおける生物多様性の主流化など、保全生物学分野の研究で重要な成果を導き出した。



アルフレッド・オテング=イエボア博士

ガーナ生物多様性委員会 議長

アフリカを代表する生物多様性の指導者。生物多様性条約科学技術助言補助機関会合(SBSTTA)議長など国際機関の要職を歴任、グローバルな見地から生物多様性に関する国際交渉等をリードし、世界的な影響を与えてきた。



ビビアナ・ヴィラ博士

ビクーニャ/ラクダと環境 学際研究プロジェクト(VICAM)代表
アルゼンチン学術研究会議(CONICET)主席研究員

アンデス地方の野生動物ビクーニャについて、地域の先住民の伝統的な知識と生態学等の現代の科学を融合させて保全対策の実践を主導した。また、経済的価値が高いビクーニャの体毛の持続可能な利用を通じた地域コミュニティの支援や環境教育の実施も統合的に推進した。

※10月21日(火)の記者懇親会・受賞者フォーラムについて詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.aeon.info/ef/midori/midori2014/index.html>

【The MIDORI Prize for Biodiversity 2014（第3回 生物多様性みどり賞）について】

1. 実施体制

主催：公益財団法人イオン環境財団

共催：生物多様性条約事務局

後援：環境省

株式会社共同通信社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

2. 受賞者

カマル・バワ博士（インド）

アショーカ生態学環境研究トラスト（ATREE、インド）代表

マサチューセッツ大学 ボストン校 特別教授

アルフレッド・オテング＝イエボア博士（ガーナ）

ガーナ生物多様性委員会 議長

ビビアナ・ヴィラ博士（アルゼンチン）

ビクーニャ／ラクダと環境 学際研究プロジェクト（VICAM）代表

アルゼンチン学術研究会議（CONICET） 主席研究員

3. 選考

（1）選考の経過

2014年3月1日（土）から5月31日（土）までの期間、本賞ウェブサイトからの公募と有識者からのノミネーションにより候補者を募集いたしました。期間中、60カ国以上218名の受賞候補者が推薦され、有識者で構成された専門委員会による選考を経て、審査委員会による最終審査が行われました。

（2）審査基準

＜候補者に求められる要件＞

下記の3つの要件のうちひとつ以上を満たすことが求められました。

- ・生物多様性に関する多大な貢献が認められる顕著な業績がある。（実績）
- ・生物多様性に関連する活動に発展的影響を与える可能性がある。（将来性）
- ・世界の生物多様性に関する様々な活動に影響を与える取り組みをしている。（影響力）

＜評価の視点＞

業績は以下の視点で評価されました。

- ・国際的な貢献
- ・生物多様性の保全と持続可能な利用に対する貢献
- ・社会的な貢献
- ・長期的な視点と継続性
- ・創造性と新規性
- ・市民性と総合性
- ・実効性と波及力

（3）審査委員会（アルファベット順・敬称略）

審査委員長 岡田 卓也（公益財団法人イオン環境財団 理事長）

審査委員 ブラウリオ・フェレイラ・デ・ソウザ・ジラス（生物多様性条約 事務局長）
岩槻 邦男（東京大学 名誉教授）

黒田 大三郎（公益財団法人地球環境戦略研究機関 シニアフェロー）

あん・まくどなど（上智大学大学院 教授）

ヘム・パンデ（インド環境森林省次官補 生物多様性条約第11回締約国会議 議長代理）

涌井 史郎（東京都市大学 教授、国連生物多様性の10年日本委員会 委員長代理）

【歴代受賞者】

第1回受賞者（2010年）

ジャン・ルミール氏（カナダ）生物学者、探検家、映画製作者

グレッチェン・C・デイリー博士（米国）スタンフォード大学 教授

エミル・サリム博士（インドネシア）インドネシア大統領諮問会議 議長、
元インドネシア人口・環境大臣

国際生物多様性年 特別賞：アンゲラ・メルケル氏（ドイツ）ドイツ連邦共和国首相

第2回受賞者（2012年）

フアン・カルロス・カステーリャ博士（チリ）チリ カトリカ大学 教授

ロドリゴ・ガメス・ロボ博士（コスタリカ）コスタリカ生物多様性研究所（インビオ）代表

ポ・クイ博士（ベトナム）ベトナム国家大学ハノイ校 自然資源管理・環境研究センター
名誉総長

【公益財団法人イオン環境財団について】

公益財団法人イオン環境財団は、平和の追求、人間の尊重、地域への貢献というイオンの基本理念に基づき1990年に設立されました。当財団は設立以来、植樹活動や資源の再利用、環境NGO・NPOの支援等に取り組んでいます。2009年には隔年開催の国内賞「生物多様性日本アワード」を創設し、国際賞である「The MIDORI Prize for Biodiversity」と交互に実施するなど、生物多様性の問題に取り組んでいます。

公益財団法人イオン環境財団ホームページ：<http://www.aeon.info/ef/>

【生物多様性条約事務局について】

生物多様性条約（正式名称：生物の多様性に関する条約）は、1992年にリオ・デ・ジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）で採択された国際条約の1つで、翌1993年に発効しました。同条約は、生物多様性の保全とその構成要素の持続可能な利用、遺伝資源の利用から生じる利益の公正な配分を目的としています。

日本は1992年に署名し、翌年加盟しました。現在の加盟国は194カ国です。生物多様性条約事務局はカナダのモントリオールにあり、国連環境計画（UNEP）の下で運営されています。

生物多様性条約事務局ホームページ：www.cbd.int/

ご参考



カマル・バワ（インド）

アショーカー生態学環境研究トラスト（ATREE、インド）代表
マサチューセッツ大学 ポストン校 特別教授

カマル・バワ博士（1939年生まれ）は、生物多様性ホットスポットにおける保全、およびそうした地域での生活手段に関する画期的な研究によって、生物多様性科学に知的貢献を果たしてきた。博士は200に及ぶ学術論文や10の著書、専門研究論文を発表している。博士は熱帯林の生態や進化について、それまで浸透していた概念を変える、樹木再生の新技术を発見。熱帯樹木について新種の遺伝子マーカーを開発し、熱帯地方で広がっている森林崩壊が生物多様性を枯渇させることを示した。また、保全のための新たなパラダイムやツールを開発したほか、保全と貧困削減などの社会的目標の相乗効果を模索した。生物多様性のホットスポットでは保全の優先順位を特定している。

1996年、バワ博士は、生物多様性の保全と持続可能な開発に関する大手研究センターとして、インドにアショーカー生態学環境研究トラスト（ATREE）を設立。現在ATREEでは、インドにおいて3つのオフィスと7つのサテライト・センターを支援しており、155名のスタッフを雇用している。同研究センターでは、保全と持続可能性に関する科学に革新的な方法でアプローチし、希少な天然資源の管理のために新たな概念やツールを開発するほか、学際的な持続可能性科学の分野において新たなリーダーの育成に取り組んでいる。また近年、ATREEでは、保全科学および持続可能性研究のためのアカデミーを創設し、学際的な博士課程プログラムを実施している。ATREEはインドにおける第1級の保全機関のひとつとして頭角を現しており、インド国内における生物多様性研究や政策に影響を与え、また世界各国の環境機関にモデルを提示している。世界のシンクタンクに関するペンシルベニア大学の報告では、ATREEはアジアで第1位の、世界で第19位の環境シンクタンクであると評価されている（2011年および2012年）。

バワ博士は、様々な協議会や国際的なグループの委員長またはメンバーとして、保全科学、活動や政策の方向性に影響を与えてきた。また熱帯生物学協会の会長として、21世紀の保全戦略計画の策定を主導してきた。農業システムにおける生物多様性を協議する国際討論のために、農業ランドスケープにおける生物多様性の促進に関する計画を共著。西ガーツ、東ヒマラヤといった生物多様性の「ホットスポット」に関する戦略的保全計画の策定に主導的な役割を果たした。また博士は、インドの生物多様性ホットスポットに関する2冊の卓上用大型豪華本「サヒアドリ：インド 西ガーツ」「ヒマラヤ、山の生活（www.Himalayabook.com）」を著している。広く知られたこれら2つの生物多様性ホットスポットに関する著作にとどまらず、バワ博士は、保全生物学者のための主要テキストである「保全生物学：南アジア入門書」の共著者を務めている。

バワ博士は、研究、ATREEの設立、世界的機関への影響、保全生物学ならびに持続可能な開発に関する著作を通して、顕著な貢献を果たしている。



アルフレッド・オテング＝イエボア（ガーナ）
ガーナ生物多様性委員会 議長

アルフレッド・オテング＝イエボア博士（1946年生まれ）は、アフリカを代表する生物多様性の指導者。生物多様性条約科学技術助言補助機関会合（SBSTTA）議長など国際機関の要職を歴任、グローバルな見地から生物多様性に関する国際交渉等をリードし、世界的な影響を与えてきた。特に、科学と政策の対話の重要性を提唱し、生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム（IPBES）の設立、運営に大きく貢献してきた。

オテング＝イエボア博士は、生物多様性の保全と持続可能な利用を行う上で特に重要な会議におけるガーナとアフリカの代表として、長きにわたってその役割を果たしてきた。博士が生物多様性条約や、生物多様性関連の他のプロセスに果たした貢献は非常に大きく、意義深い。生物多様性条約科学技術助言補助機関会合（SBSTTA）第9回及び第10回議長を務めたほか、森林、海洋、保護地域、能力開発など様々なグループ会議の議長等を歴任、ワシントン条約（CITES）やボン条約（CMS）、ミレニアム生態系評価（MA）、地球環境ファシリティ（GEF）等にも参画した。加えて、SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）の運営委員会議長も務めるなど生物多様性に関して長年にわたり広範に貢献している。

また、特筆すべき貢献として、科学と政策の対話の促進を挙げることができる。博士は、生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム（IPBES）の構想以前から、科学と政策の対話の重要性とそのためのインターフェイスの確立を提唱し、IPBES 設置の準備会合で共同議長を務めて IPBES の正式な設置に向けた各国の意見の集約に主導的な役割を果たした。

生物多様性と生態系サービスに関する科学と政策のインターフェイスの確立を目指す世界的な議論のプロセスにおいて、博士の残した功績は高く評価された。

（*） SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）

IPSI は農地や二次林など二次的自然環境における生物多様性の保全やその持続可能な利用の促進のため、日本政府環境省及び国際連合大学高等研究所が中心となって提唱したもので、2010年、生物多様性条約第10回締約国会議（CBD/COP10）の期間中に設立された。人と自然が共生してきた日本の「里山」が世界の自然共生社会のひとつのモデルとなりうると考えられている。



ビビアナ・ヴィラ

ビクーニャ／ラクダと環境 学際研究プロジェクト (VICAM) 代表
アルゼンチン学術研究会議 (CONICET) 主席研究員

ビビアナ・ヴィラ博士 (1961 年生まれ) は、アンデス地方の野生動物ビクーニャ(*1)について、地域の先住民の伝統的な知識と生態学、動物行動学、動物の福祉といった現代の科学を融合させて保全対策の実践を主導した。また、経済的価値が高いビクーニャの体毛の持続可能な利用を通じた地域コミュニティの支援や環境教育の実施も統合的に推進し、野生生物の保全と地域コミュニティの安定的発展の両立を実現し、地域に根差しながらも世界的に注目すべきプロジェクトの牽引役として大きく貢献した。

ビクーニャの保護と持続可能な利用に関するヴィラ博士の業績は、現代的な野生生物保全モデルのひとつとして位置付けられるものであり、非常に意義深い。アンデス地域においてビクーニャは生態学的に重要なだけでなく、その体毛などの有用性から経済的にも社会文化的にも重要な種としてかつては大切に扱われてきたが、過去数世紀にわたり大量に捕殺され、生息数が減少した。ビクーニャの回復と持続可能な利用を目指し、博士は、研究プロジェクトグループ VICAM(*2)を主導し、アンデス地域のコミュニティの協力を得て、ビクーニャを囲い込み殺さずに体毛を刈る古代の野生生物捕獲技術「チャク」を復活させ、手続きにのっとり野生ビクーニャの捕獲、毛の刈込、リリースといった流れのアプローチ開発に成功した。この結果、経済的に困窮していた先住民のコミュニティは収入を得られるようになり、生態系や種の保全にインセンティブを見出すようになった。この取組は、地域の伝統的知識と現代の科学的アプローチを融合させ、地域の先住民コミュニティの自立を支援し、環境教育を実施することによって、長期的にビクーニャの保全と先住民の生活の安定・向上を図ろうとするものであり、「人と自然の共生」という概念を具現化する優れた実践例といえる。

野生生物の保全と地域コミュニティの安定的発展との両立を実現した牽引役として、博士の貢献は高く評価された。

(*1)ビクーニャ

南米に生息するラクダ科の哺乳類。絶滅危惧種としてワシントン条約附属書Ⅱに記載されている(アルゼンチン等、数ヶ国では個体数が依然として不安定であり、附属書Ⅰに記載されている)。ビクーニャの体毛は動物界で最も細く、その毛製品は高級品として利用される。(附属書Ⅰに記載されるか、附属書Ⅱに記載されるかは、保全状況によって決まる。種全体に対するルールが存在するわけではない。)

(*2)研究プロジェクトグループ VICAM

VICAM(Vicuñas, Camelids and Environment)は、ビクーニャ等ラクダ科の動物の保全に関し、環境教育などにより、生物科学、社会科学面から保全対策にアプローチしているアルゼンチンの研究グループ。12名の研究者が地域の先住民の伝統的知識に敬意を払いながら、科学的に生物多様性の持続可能な利用を推進している。